



ほうさ 第2号

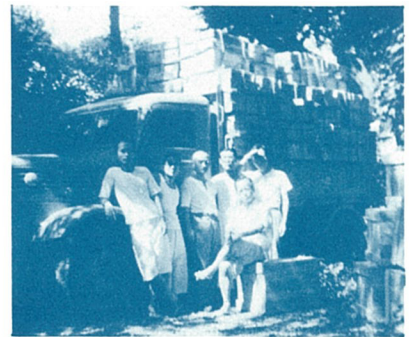
1980年6月
名古屋市蓬左文庫
Nagoyashi Hôsabunko

続・蓬左文庫三十年

蓬左文庫がいよいよお国入りときまり、約6万5千冊にのぼる蔵書の荷造りが始まったのは、昭和25年9月上旬であった。名古屋市からは、社会教育課の職員数名が上京し、きびしい残暑の中を約10日間、書籍の点検や箱詰めなどの作業に従った。3時の休憩時間にも、菓子はおろか、お茶さえも不足がちの時代で、サッカリンを冷水にとかしたものが唯一の甘味であった。

書籍が名古屋に到着し、現在の書庫に収められてからも、その荷解きや再整理には、意外に手間がかかった。無窓式の書庫は、秋口はまだしも、冬ともなれば巨大な冷蔵庫と化する。そこで、たびたび外へ出ては焚火をする。体が温まるとその都度、焚火を消してから、又、書庫へ——という具合であった。書庫の周辺も、荒涼たる焼跡で、今は牡丹などの花壇に変わったあたりも、瓦や石ころが散乱し、雑草の間を、シマヘビなどが出沒した。マムシも2度ばかり見かけたこと

がある。施設の方は、翌26年の初、焼け残った木造の倉庫を改造して、事務室と閲覧室とができたけれども、風通しがよすぎて、夏は涼しかったが、冬は“冷房完備”？で、オーバー着用のまま、火鉢を抱きながら執務するという状態がつづき、また、事務室・閲覧室と書庫とが別棟のため、雨の日の出



文庫蔵書発送の日（昭和25年9月）



旧閲覧室・事務室（昭和30年頃）

納には、傘を必要とした。ガス・ストーブが入り、リノリュームが床に敷かれ、通路に屋根が設けられたのは、何年かのちのことである。

さて、昭和34年、兼案の「名古屋叢書」の刊行が開始された。続編を加えて45巻、10ヵ年にわたる大事業である。このおかげで、当時の職員2名のところ、1名増員されたが、それでも追いつかず、以後“毎日が月曜日”ともいうべき時期がたびたび続いた。この間、40年7月、東図書館新築が成り、文庫はその2階に同居することになった。ちなみに、この辺一帯約6,600㎡の土地は、文庫の敷地として、徳川義親さんから市へ寄付されたものである。ともあれ、文庫も面目一新、明るい近代的な新館の中で、安全かつ能率的な執務が可能となり、ささやかながら、展示室も開設された。

「名古屋叢書」が難航をかさねつつも予定通り終了したあとは、これも待望の総合目録の刊行に切りかえ、5ヵ年を費やして、漢籍・国書・古文書古絵図の各分類目録3巻を世に送り、これと前後して、「名古屋叢書」の総目録と索引3巻を出した。この間「尾州茶屋文書」「尾崎久弥コレクション」「小酒井不木文庫」など合計約2万点の寄贈を受け、これらの整理や目録の編集なども併行的に進められ、なお続行中のものもある。

30年の歩みをかえりみると、今からは信じがたいようなことが多かった。温故知新——この機会に、そのいくつかを拾い書きしておくのも、無意味ではないと思う。

(織茂)

おわび：1号において、特別展を「翌26年4月」としたのは「2月」の誤りでした。つつしんで訂正いたします。



6. 1(田)～7. 31(木)

浮世絵・江戸の四季 第一部

浮世絵版画は、主に都市民衆を対象として生産されたから、彼らの好みを敏感に反映して尽きるところがない。浮世絵師たちは、いろいろな面において最新の流行を競って描き出した。たとえば、その時々にもてはやされた人気役者や美人の型などに精通し、着物の柄や履きものの形、家具・調度から小物類に至るまで世のはやりすたりを取り入れて、めまぐるしいばかりのバラエティを示している。

このような流行感覚とあわせて、絵師たちは作品の中に、しばしば、四季の変化や年中行事をも盛り込んだ。浮世絵における季節の表現は、単に“花を添える”程度のもの、象徴的な意味をもつもの、時にはそれ自体が主題をなすものなどさまざまであるが、そこから感じられる雰囲気は、四季の変化に直接結びつく生業

を営んでいた農山漁村の人々と異なり、余裕をもって季節を楽しむことのできた都市民衆のそれであり、その点では、季節感を重くみる俳文学などとも共通し、それらの伝統をもつ現代人の好みに投ずるところも多い。また、花見や物見遊山、納涼花火大会などのレクリエーション、五節句等の行事が民衆化した様子を具体的に語っている。それはもちろん、近世市民の生活のすべてではないが、たとえば夕立に洗濯物を取りこむ女たちの姿からは、平和で素朴な生活の息づかいが聞こえるし、桜や秋草を背景に、憂うつな表情をただよわせる遊女の図からは、近世末期の民衆の屈折した暗いエネルギーの一端がうかがわれたりするのである。

出品目録

＜春の部＞

- 1 よし原十二月のうち 祝月
朝霞楼芳幾 1枚
- 2 道外武者 御代の若餅
一猛斎芳虎 1枚
- 3 〔獅子舞〕(赤摺絵)
国 安 1枚
- 4 当世立衆見立五節句(人日)
豊国(三代目) 1枚
- 5 よしはらやうじ廓の四季志(2月大神楽)
溪斎英泉 1枚
- 6 〔節分〕(赤摺絵)
国 安 1枚
- 7 東都高名会席尽 梅の木
豊国(三代目) 1枚
- 8 俳仙十哲ノ内 丈草
香蝶楼国貞 1枚
- 9 当世立衆見立五節句(ひな祭)
豊国(三代目) 1枚
- 10 岡本屋内 豊岡
溪斎英泉 1枚
- 11 〔昼稽古之図〕
歌麿(二代目) 1枚
- 12 〔六歌仙の内〕小野小町
広 重 1枚
- 13 花名所東百景 飛鳥山之花
溪斎英泉 1枚
- 14 光氏温泉遊興ノ図
豊国(三代目) 3枚続き
- 15 名所江戸百景 吾妻橋金龍山遠望
広 重 1枚
- 16 風流名頭字尽 柳(りう)
朝霞楼国芳 1枚

＜夏の部＞

- 17 法〔みのり〕(藍摺)
五湖亭貞景 1枚
- 18 浮世美人十二箇月 五月川びらき
溪斎英泉 1枚
- 19 〔六歌仙の内〕在原業平
広 重 1枚
- 20 〔かきつばた・五代目幸四郎〕
豊国(二代目) 1枚
- 21 浮世流行花暦 木場のかきつばた
溪斎英泉 1枚
- 22 浮世美人十二箇月 六月天王祭
溪斎英泉 1枚
- 23 当盛六花撰 紫陽花
豊国(三代目) 1枚
- 24 諸国名所百景 京都四条夕すゝみ
広 重 1枚
- 25 〔夕立之図〕
五渡亭国貞 1枚
- 26 本朝風景美人競 相模江ノ嶋
香蝶楼国貞 1枚

- 27 今様七小町 関でら
一勇斎国芳 1枚
- 28 東海道名所之内 江之島
国貞・広重 1枚
- 29 両国夕納涼之図
香蝶楼(一陽斎)豊国 3枚続き
- 30 東都両国橋夕涼図
一筆斎英泉 3枚続き
- 31 六十余州名所図会 尾張津島天王祭り
広 重 1枚

＜秋の部＞

- 32 文月の七夕
朝霞楼国芳 1枚
- 33 当世立衆見立五節句(七夕)
豊国(三代目) 1枚
- 34 今様七小町 そとは
一勇斎国芳 1枚
- 35 金〔砧を打つ図〕
朝霞楼国芳 1枚
- 36 江所名所四季の脈 高輪月の景
広 重 3枚続き
- 37 〔秋草美人図〕
溪斎英泉 1枚
- 38 〔六歌仙の内〕文屋康秀
広 重 1枚
- 39 〔 同 〕僧正遍照
広 重 1枚
- 40 〔 同 〕喜撰法師
広 重 1枚
- 41 古今集和歌づくし きのとものり
溪斎英泉 1枚
- 42 准源氏教訓図会 桐壺
一勇斎国芳 1枚
- 43 青楼俄狂言尽
清 長 1枚

＜冬の部＞

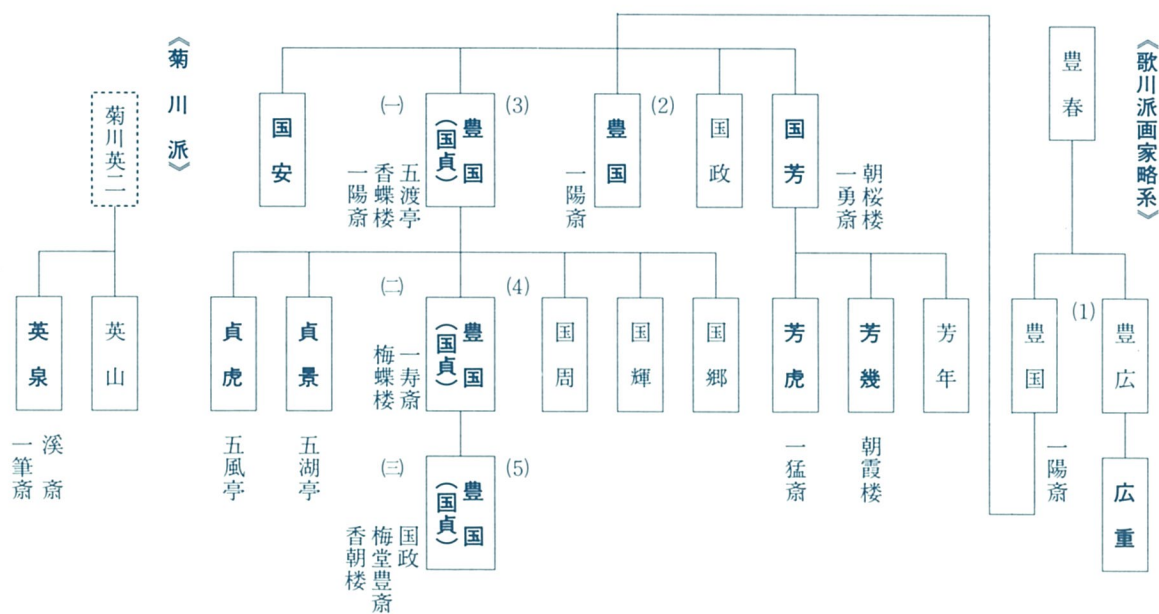
- 44 意勢固世見見立十二直 破
(神無月夷講) 香朝楼豊国 1枚
- 45 新吉原年中行事 十一月
溪斎英泉 1枚
- 46 本朝風景美人競 大和吉野
香蝶楼国貞 1枚
- 47 東都金龍山浅草寺雪景
英 泉 1枚
- 48 江戸名所 日本橋雪晴の朝
広 重 1枚
- 49 当盛美人揃之内
梅蝶楼国貞 1枚
- 50 見立廿四孝之内 孟宗
五風亭貞虎 1枚
- 51 風流絵兄弟 ふしみ常盤
香蝶楼国貞 1枚
- 52 仇競今様姿 向島の雪
溪斎英泉 1枚

〔 〕は仮題



英泉 五月川びらき

国芳 砧を打つ図



＜歌川派＞ 歌川豊春を祖とする浮世絵の一流派であるが、豊国が登場するにおよんで、ほとんど浮世絵界を独占し、文化以後はその主流となった。門人が非常に多く、ここにあげたのはその一部にすぎない。

〈菊川派〉 菊川英山を祖とする一派（英山の父英二は狩野派の画家）で、門弟も多いが、類型に流され、ひとり英泉が光彩を放つのみである。

次回展示会（８・９月）は

浮世絵・江戸の四季 第二部です。

蓬左文庫の蔵書印

その2.「尾陽内庫」印記

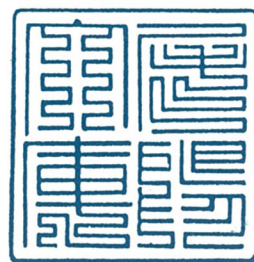
織 茂 三 郎

前号の「御本」印記に次いで古くかつ重要な印記。「尾陽」は名古屋を、「内庫」は名古屋城二の丸庭園の一隅にあった奥御文庫を意味する。たて・よこ共に6.7cmの大型印で、「御本」印に比較すると、字体なども複雑でもののし強い感じが強い。使用された時期は、尾張藩二世光友の頃らしく、初代義直と光友の蔵書に捺されているが、義直の方

がはるかに多く、相当な数に達する。(前号で、義直の蔵書の「ほとんどすべて」に「御本」印記が有るように書いたのは、筆者の思いちがいなので、これを「おおむね」と訂正させていただく。)「本朝皇胤紹運録」(中)や「日本書紀纂疏」のように、「御本」印と「尾陽内庫」印と両方ともにおした例もある。

ところで、前号にも記した駿河御譲り本は、家康がその晩年、駿府(現静岡市)に設けた駿河文庫の蔵書およそ1万点を、その死後、遺命によって、おもに尾張・紀州・水戸の三家に分譲したもので現在、最も大量に明確なたちで保存されているのは尾張家の分、すなわち蓬左文庫だけといえる。

有名な金沢文庫本「続日本紀」や「斉民要術」など重文級の典籍や家康がみずから刊行したわが国最初の金属活字版「群書治要」など、まれにみる貴重な図書が多く、政治家および人間としての家康の幅の広さや奥行きを深さを示すユニークな資料群となっている。なお、御譲り本については、川瀬一馬博士の精細な研究が、早く昭和9年(「書誌学」3ノ3)に発表されている。



「尾陽内庫」印

(おりも さぶろう・蓬左文庫調査研究員)



資料紹介 ②

尾張の地誌というと、「張州府志」(宝暦2)「張州雜志」(天明年間)「尾張徇行記」(文政年間)「尾張名陽図会」(同)「尾張志」(天保15)「尾張名所図会」(同)といった大部のものが、すでに翻刻または復刻されてよく知られているが、安永年間(1780頃)の成立とみられる「蓬左旧勝録」は未刊で、稿本(22巻23冊、徳川林政史研究所蔵)と抄本(岩瀬本14冊・蓬左本2冊・鶴舞本2冊等)によって伝えられてきた。編者の蛙面坊茶町(鈴木作助)は、「尾州家分限帳」(明和一天明頃、本文庫蔵<29-2>)等によれば、西新町に居住する三十俵取りの下級藩士(その子作十郎は五十俵・馬廻組)であった。戯作者風の筆名

を用いているが、内容は「延喜式神名帳」はじめ「尾陽雜記」「尾張大根」等、百種にも及ぶ史料を引用しつつ編集した労作で、自序に述べる通り「古書に顕し、村老・雑夫の口碑に残りたれば、執捨するは見る人の心に有らめと、只其俵に拾ひ綴りて冊となし」ている。対象とした地域は、名古屋城下、尾張八郡、及び尾張藩領としての濃・信・摂・江州の一部で、末尾に城下の年中行事御祭礼式も付してあり、質・量ともにすぐれた地誌の一つとなっている。本文庫に林政史本の筆写本があり、関覧に供している。

出版 物 一 覧

名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録(S.50年刊) 3,500円	名古屋叢書続編 索引(S.47年刊) 700円
名古屋市蓬左文庫国書分類目録(S.51年刊) 4,000円	同 総目録(S.44年刊) 400円
名古屋市蓬左文庫古文書古絵図目録(S.51年刊) 2,500円	善本解題図録第一集(S.43年刊) 200円
同 第二集(S.54年刊)1,500円	同 第二集(S.55年再版) 300円
同 第三集(S.55年刊)1,500円	同 第三集(S.55年再版) 300円
尾崎久弥コレクション目録第一集(S.52年刊)1,500円	蓬左文庫重要文化財図録(S.52年刊) 200円
同 第二集(S.54年刊)1,500円	日本の古典<蓬左文庫図録>(S.52年刊) 200円
同 第三集(S.55年刊)1,500円	蓬左文庫・源氏物語図録(S.53年刊) 300円
名古屋叢書(正編)索引・総目録(S.53年刊) 2,000円	

★以上の出版物は、本文庫事務室において頒布しています。郵送希望の方は郵送料が必要ですので、お問い合わせ下さい。 電話 (052)935-2173

★「善本解題図録」の再版ができました。これは本文庫の善本(貴重図書)について解説を加えたものですが、第一集には駿河御譲本の内から和書三十種が、第二集には同じく漢籍三十七種が、第三集には日本古代の古典三十種が収録されています。

▷▷▷ 利 用 ご 案 内 ◁◁◁

▷開 館 時 間 午前9時30分～午後5時

▷休 館 日 毎月曜日・第3金曜日(館内整理日)

祝日(日曜に重なる場合は日曜開館、月・火休館)
月曜 " " 月・火休館

年末年始(12月28日～1月4日)

▷閲 覧 料 普通図書 無料

重要図書 有料(1部 100円)

▷展 示 会 特別展を除き入場無料

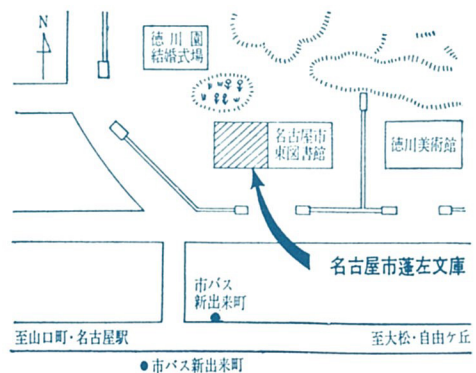
▷複写サービス 普通図書のうち保存上影響のないものについて複写サービスを行ないます。その他、マイクロフィルムの利用、写真撮影等の申請を受付けますので、ご来庫の上、ご相談下さい。

名古屋市蓬左文庫

〒461 名古屋市東区徳川町2-27

☎ (052)935-2173

(市バス 新出来町 北 100m)
山口町 東 500m)



「蓬左」第2号 ☆昭和55年6月1日発行 ☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫(東区徳川町2-27)
☆無料 ☆不定期刊行 ☆印刷：大同印刷(東区泉2-3-18)